Ⅱ－１　「第三者評価」の在り方に関する意識調査【結果報告】

《調査対象と方法》

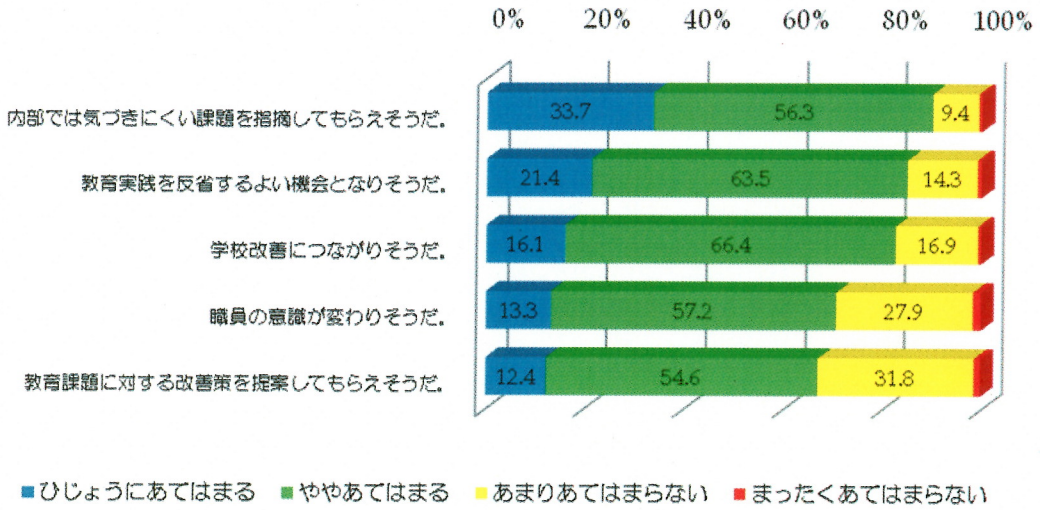
調査対象：九州内の小学校・中学校・高等学校・中等教育学校・特別支援学校
（回収率４４．３２％：２３３７件／５２７３件）

調査方法：郵送による質問紙調査

１．「第三者評価」に対する期待感

学校は、第三者評価をどのようにとらえているのであろうか。まずは、第三者評価に対する期待感の傾向について、各項目の度数分布を確認した（図表１参照）。肯定率は各項目につい６７．０～９０．０％と高い数値を示している。特に、内部や地域レベルでは気づきにくい課題の指摘に期待している。

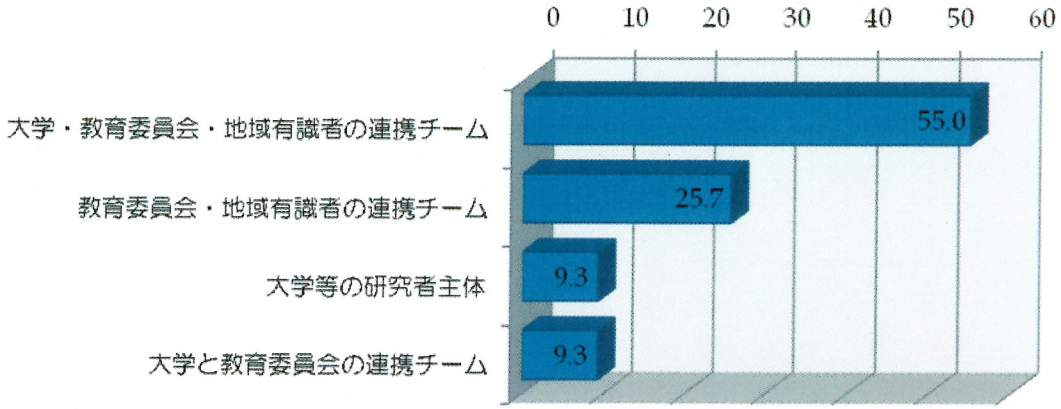
学校属性ごとの相違について検討したところ、次の点が明らかになった。小学校や特別支援学校の期待感が高く、中学校は低い。人口規模が大きい市町村ほど期待感が低い。沖縄県と福岡県において期待感は低く、鹿児島県・熊本県・佐賀県において期待感は高い。



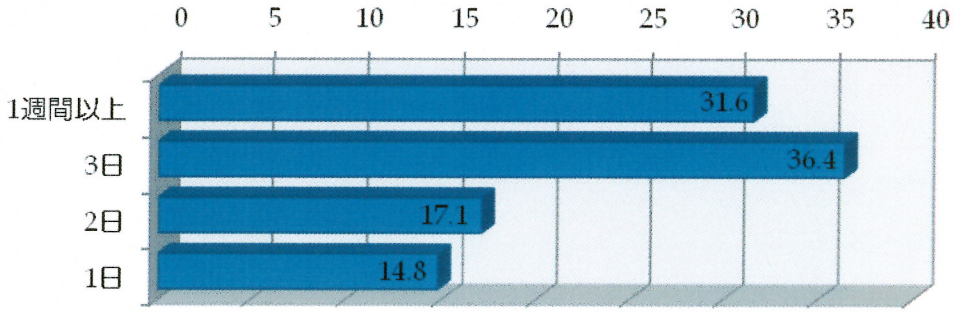
図表１　第三者評価に対する期待感

２．第三者評価の委員構成と観察期間

それでは、各学校は、どのような評価形態を望んでいるのであろうか。委員構成と観察期間について質問したところ、図表２及び図表３に示す。結果が得られた。「大学・教育委員会・地域有識者のチーム」及び「３日間」以上の頻度が高い。多様な分野の委員により、多角的に評価してほしいとする期待が示されていると解釈できる。



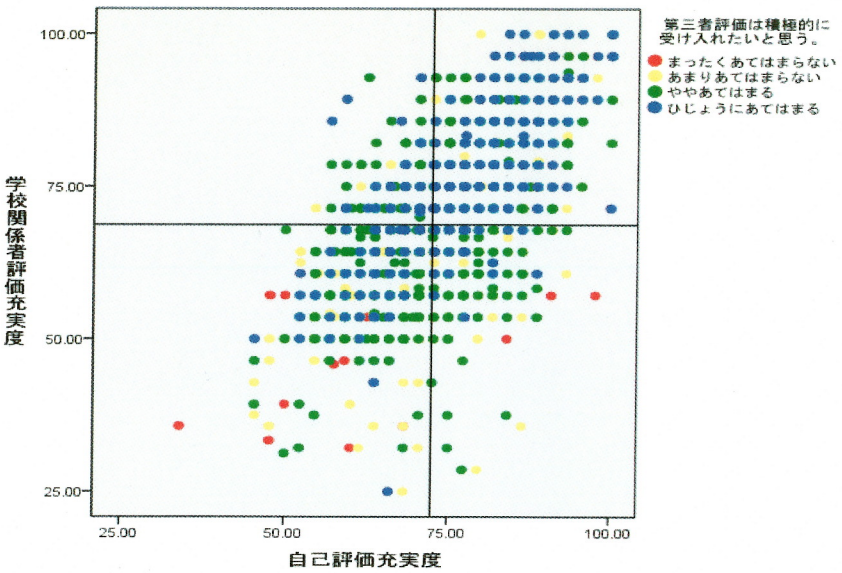
図表２　望ましい第三者評価委員の構成



図表３　望ましい観察期間

３．自己評価・学校関係者評価との関連

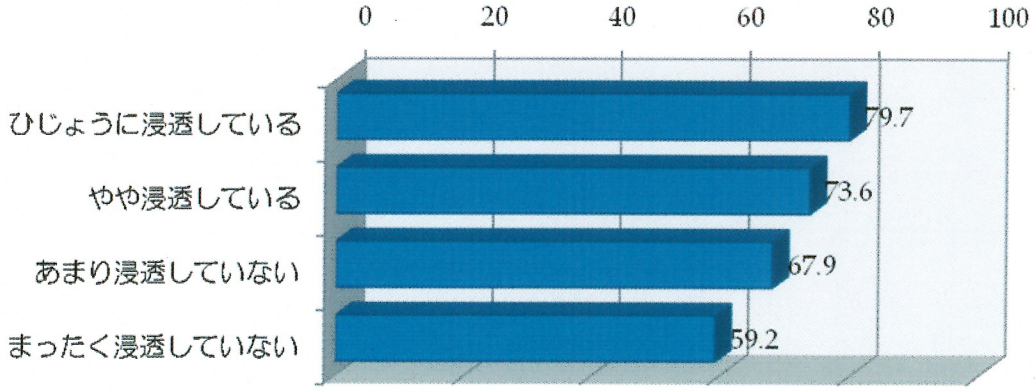
第三者評価に対する学校側の期待感や肯定的態度は、自己評価や学校関係者評価がすでに整備されている学校において高いのではないだろうか。この点を確証するために、自己評価充実度（９項目）及び学校関係者評価充実度（９項目）を測定し（２５～１００点の分布)、双方の変数で構成される散布図上に「第三者評価の受容に対する肯定的態度（１～４点)」の回答傾向を付置した（図表４参照)。図表の実線は、各軸の平均値である。分析の結果、第三者評価の受け入れに積極的な学校群（青色)の多くが、自己評価及び学校関係者評価ともに充実していることがわかる。一方、第三者評価の受け入れに消極的な学校群（赤色)は、自己評価及び学校関係者評価ともに低調なゾーンに最も多く分布している。



図表４　自己評価・学校関係者評価との関連性

４.「評価の意義」の浸透状況との関連

第三者評価に対して肯定的な態度を示す学校では、「評価」の意義が校内で共有されている可能性が高いのではないだろうか。図表５は、浸透状況ごとの第三者評価肯定得点（図表１の５項目の百分率得点）である。分析の結果、この仮定に示す傾向が認められている。



図表５　「評価の意義」の浸透状況との関連性

５．学校の第三者評価に対する不安感

学校は第三者評価に対する一定の期待感や肯定態度を示しつつ、一方で、不安を抱いている。自由記述内容から、学校側の不安をうかがい知ることができる。

第１は、多忙問題である。第三者評価の導入により、現状よりも、さらに職務量が増えることを危惧している。

第２は、実現可能性である。近隣に大学等がない地域、過疎地域等では、第三者評価に肯定的態度を示しつつも、実現は困難であろうとする意見が多い。

（愛媛大学　　露口健司）